

喜びを生み出す学園に

加藤 清孝

学校法人阪南大学理事長

学校法人阪南大学は、大阪府松原市にて阪南大学と阪南大学高等学校を設置する学校法人である。2023年4月、私はこの学園の理事長に就任した。就任後いち早く手をつけた事案が、2040年の学園のあり方を示す、「Vision 2040」の策定であった。

2040年は、少子化進行の象徴ともいえる年であるが、本学園にとっては、阪南大学が創立75周年を迎える年であり、また、その前年の2039年は、学園の祖となる大鉄工学校が、小林菊治郎・奥田政三両先生により創立されて100周年を迎える記念の年でもある。理事長に就任以来、常に私の脳裏にあるのは、この学園創立100周年、そして大学創立75周年を、いかに「よりよく」迎えるか、そのための経営の道筋をどのように作るかということである。その第一歩として、学園で働く者すべての羅針盤となりうるビジョンを策定したいと考えた。

ただ、ビジョンを策定する前作業として、われわれの学園は一体どのような思いで創られ、現

在もその役割を社会から求められているのかを確認する必要があった。「よりよく」というのは、単に財務上の数字を意味するのではない。創立者の建学の精神に則り社会的責任を果たす姿勢が、私学経営の基盤になくはならないのだ。そこで、創設者が残した言葉を拾い集めその精神を読み取り、我々の存在意義をまとめ、その上で、Vision2040を次のとおり定めた。

生徒・学生に「阪南に来てよかった」と思われる、

保護者・先生に「阪南に行かせてよかった」と思われる、

地域に「阪南があつてよかった」と思われる、
『生徒・学生・教職員、保護者、そして地域に、
「喜び」を生み出す学園となります。』

われわれのビジョンは、他の法人や大学が周年を機に作成するそれと比べると、拍子抜けするほどシンプルに感じられるかもしれない。ま

た、一部教職員からは「既に達成されているのではないか」との意見も出た。しかし、いくつかのデータを見ても、多くの学生が本学での学びや生活に満足していないことは明らかであった。学生が本学での学びに満足して歓びを感じてくれるなら、送り出してくれた親御さんや高校の先生もその姿を見てきつと歓んでくださるだろう。さらに、学生のみならず、そのように感じた方の多くは、きつと本学のファンとなり、本学の魅力を地域や学校で伝えてくださるに違いない。この循環を、これから15年かけて、関西で、特に南大阪の地域で創りだすことこそが、志願者確保において重要になると私は考える。

阪南大学での学びにあまり満足感を得られていない学生が多い一方、在学中から熱狂的に大学に対して熱い思いを持ってくれる学生も一定数存在することがわかった。そのような学生や卒業生を対象に調査したところ、見えてきた共通の事項がある。それは、彼ら彼女らが①自分なりの一歩を踏み出すことに挑戦し、②その挑

戦を教員や職員が適切にサポートしてくれたことで、③最終的に自分は成長することができたとの実感を持っていた、ことである。このことは、Vision2040実現のための貴重なヒントとなる。

大学がビジョンを定める場合、様々な数値目標を同時に設定することが多いと思われるが、われわれはそのような設定は行わなかった。ビジョンがシンプルだけに、実現へのアプローチは多様であると考えたからだ。大学内の様々なセクションが学生の成長を促すことを第一に考え、能動的に取り組む方がより適切ではないだろうか。それは結果として、学園で働く教職員にも歓びを生み出すことにもつながると信じている。

長いようで短い、われわれの15年かけての挑戦を、この場を借りて紹介させていただいた。